猿の生き肝

むかしむかし、竜宮のお姫様、腹病んだど。どんなに薬飲ま

へでも、どうやしても治らねくってぇ、サルの生き肝飲めばいい、ってお話、まずどことなく聞いたために、へぇばサル、誰迎えに行くがっていうことで、竜宮にはカメが小使で、クラゲが釜の火焚きであったそうだ。カメどご、「したらオメ、陸さ行って、まずサルどこ誤魔化して、どうかして連で来い」ってことで、カメ、海から泳いで丘さあがってきて、空いいとき松原歩いたっけ、サルいであったそうだ。そしたっけ、「サル、竜宮さ遊びにいがねがぁ。オイさ行げば、なんーた、うめぇごっつぉ(ご馳走)もすっしぃ、みんなきれいだお姫様だいっぱいいでぇ、もてなすし、おれ連れていくんて、いがねがぁ」ったけ、猿また行ぎてくなったど。「せば、行ぐがなぁん」ってことで、サルどこカメ連れて行ったわけだ。竜宮さ着いたっけ、よく来たって、みぃんなしてちょしして、ごっつぉうじっぱりこしえで、ほれ、飲ましぇて食しぇて、晩げなって休んだっけ、夜ん中にサルまだぁ、オシッコに起ぎたわけだ。しったけ、釜の火焚きのクラゲまだぁ、よげだぁごとほれ、教えっだって言わったものにゃ。「サル、おめ、なっしに来だったがぁ」って。「おれの姫、腹病んで、なんぼ薬飲ませてもどうしても治らねしてぇ、サルの生き肝飲ましぇれば、いぐなるって話っこ聞だために、おめどごカメ迎えに行ったったど。オメ明日殺されるホラァ」って、知らせたわげだねぇ。んだっけ、サル、急にワァイーワイって泣ぐんだったわけだ。みんな、寝で休んでら人も目覚めて、なぁしただの、かしただのって言ったけ、「オラ、

空いいために松林さぁ、生き肝ほれぇ、干しぇて来た」って言わったどぉ。「オレ今晩行かねばぁ、明日カラスにがって、みんな食れてしまう」って。そしてワァイワァイって泣だそうだねぇ「おー、しぇば、そいだばたいへんだ」ってことで、「したらぁ、カメ、おめまた送って行げ」ってほれぇ、カメまだ、乗しぇで、陸さ送って来たわけだ。陸さあがったけぇ、サル言うに、「カメ、おめオイどご、おめの姫、腹病んで、何飲まへでもいくなんねって、サルの生き肝飲まへぇればいいってごどで、おめオイどご迎えに来たったべぇ。オレしぇば今、殺されっとこであったし、オメなにしに嘘ついて、オイどご連で行ったか」って、今度カメどごはぁ、そこらの棒でやみ叩ぐったわけだ。カメもなんもはぁ首引っ込まへで、死んだふりしてだまっとしてらどはぁ。背中の甲羅、みな割れヒビたつまで叩がいで、今度死んだべぇと思って、サル、カメどごドンと海さ投げて、山さ帰って行ったど。どうやらかやら、生ぎてカメ竜宮まで帰ってきたそうだ。帰って来たっけぇ、「クラゲ、サル夕べオシッコに起きったっけ、クラゲ、みぃんなほれぇ、オイの姫腹病んで、オメの生き肝飲まへぇればいぐなるって迎えに行ったづ。なして来たがって、知らせたために、サル泣いて生き肝干したって、嘘ついてしまったものねぇ。オレ、叩かいで、こういうに背中割れヒビたったって。やっと生ぎて来た」って来たわけだ。竜宮の人がたもおこってしまって、「なぁにしに、おめ、余計な告げ口したが」って、カメに「おめ、クラゲどご好きだようにに折檻せ」って。カメ、クラゲの肩さ足かけて、首抜かして海さドンと投げてしまったど。そうしたがら、クラゲ、フワラフワラフワラとそれ、浮がんで流いであぐしい、カメまだぁ、甲羅割れヒビ入ったってことだったものねぇ。そいでまずう、お話終わりだ、まずはぁ。

堀内ツナ（扇田・大正4年生・83歳）

〈解説〉

「通観」にある仙北郡の生保内に伝わる「猿の生き肝」は、竜宮の乙姫たちが猿を誘い、乙姫たちのうわさ話によって計略にかかったと知った猿が逃げ出したことになっているが、ここでは猿を迎えに行くのが亀であり、うわさ話をしたのがクラゲになっている。亀の甲羅の割れ模様と、クラゲのフワフワした生態とをからませたところなど、生保内の話より滑稽味が加わっている。